
はじめての気持ち

知陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじめての気持ち

【Nコード】

N2731BA

【作者名】

知陽

【あらすじ】

内気だけど、とってもおもいやりがあり、正義感がある、純粋で天然な女の子、結衣と、モテモテの元樹のハラハラドキドキ、純粋ラブストーリー

元樹と智樹（前書き）

純粹なラブストーリー、誰もが憧れる、ラブストーリーを描きました。

元樹と智樹

「ハアハアハア……」

ギリセーフだ。今日、寝坊したあたしは、急いで家をでてきた。以外に早く着いた。

あたし、浅野 結衣はただいま高校1年生だ。非リア充。

高校生になり、夏休みが終わった。夏休みは講習でつぶれた。

あたしには悪いくせがある。男子とはなせない。なぜか意識してしまっ

その場から逃げる。なんでかわからないけど、いつもそうであった。だから、恋愛は苦手。親友の川口 里香は、クラスの人気者。そして里香はあたしを

なんとしてでも目立たせたいらしく、学級委員になってしまった。めんどろくなことになったのだ。

「おはよう、里香」

「おお、結衣ーおっは。っていつかあれみてよ。お似合いだよねー」
「なにがよ」

「だから、川崎 元樹！王子様だよ！」

「ああ。元樹君かぁ」

「元樹君があつて、あんたね、元樹君は、サッカーうまくてイケメンでやさしくて完璧だわ」

「はいはい。100回きいたわ」

「なにそれ。あたしは、南ちゃんのほうがあこがれで好きだよ」

「まあ、かわいいし、性格いいからね、お似合いだけどさ」

「うんうん。思うよ」

「うんうん。じゃないでしょ。結衣！元樹君のこと好きなんですよ」

「いやぁ、好きじゃないよ」

「ふーん」

「キーンコーンカーンコーン……」

「じゃあね、なったから」

「うん。席遠いからね」

はあ。疲れた。川崎 元樹くんは、モテモテだから、好きになっ
てはいけない気がした。

新井 南は、女子と男子からの人気者で、里香が対抗心をもっ
てるようだ。すぐわかる。

南ちゃんと元樹君ほどお似合いカップルはいない。うん。

でもなあ、学級委員一緒って気使うなあ。そう。あたしと元樹君学
級委員になってしまったのだ。

「ガラア……」

「おはよーお前ら！今日も元気かー」

あ、この先生はあたしの担任で岡本 明。36歳で、体育担当だ。

すごく暑苦しくて、顔は……なんと申しましょうか。濃い？うん。

「今日の放課後、学級委員の川崎と浅野は職員室に来い」

「は、はい」

「はいっ」

あたしと元樹君は答えた。

「じゃあ、これでおわりー。さらばー！」

「ガラッ……ドン！」

風のように行ってしまった。そして、アバウトな先生……。

「浅野、あのさ職員室、一緒にいこっ」

「うん！よろしくっ」

「おう！んじゃ」

え？今あたし、普通に話せてたよね。なんで？あたし、意識しな
かった。

やったー。あんなことははじめてだ。なんだろう。人と人の間に壁を作らない人？

やっぱり、王子様だけのことはありますわ。うん。

でも、好きになっちゃだめだぞ結衣！南ちゃんと元樹君なんだから！うん。でも、心臓が一瞬、

痛くなった。なんだろう、病気？明日、病院行こうつと。

…そして、午前の部はあつという間におわり、お昼になった。

「おなかすいたー」

「屋上いこつ」

「おっけいー」

この学校では屋上の使用が禁止されている。でもあたしと里香は、天文部に入り、

「星の観察に使う」と先生に申し立てたら、結構簡単に鍵を手に入れた。

だからあたしと里香の貸し切りなのだ。

「うまい。やっぱり、メロンパンとコーヒー牛乳だねー」

「あたしは、レーズンのほーが好きー。コーヒー牛乳はあたしも好きだけど」

あたしは、メロンパン。里香はレーズンパン。これが定番である。

「ねえ、結衣？」

「なに？」

「さつき元樹君と何話してたの？」

「いや、元樹君が放課後、職員室一緒にいこうつて」

「ええ！まぢで！？いいなあ。あの、王子様にあなたはねえ」

「いやあ、それよりも、緊張しなかったのがびっくりだよ」

「へえ。結衣にしてはめずらしいね」

「うん。うれしかったなあ。緊張しなかったの」

「うん。結衣あんたさ、少し喜びどころずれてますよ。」

「え？」

「あーもーいーよ。とりあえず、目標は結衣と元樹君が付き合う」と

「え？いやいや、南ちゃんいるし、無理でしょ」

「はあ？あんたそんなくらい取り戻すの！南ちゃんより、あたしのほうが……」

「ハハハッ」

「笑わないでよ！いいね！とりあえず、がんばりなよ」

「まあ、気が向いたら」

あたしは、全くその気がなかったけど、こういう場合、うなずくのが正解。

元樹君と付き合う？ムリムリ。あたしは、前をむいてちゃんと、好きな人をさがして

頑張るって決めたもん。高校デビューするってきめたもん。うん。いいんだよね、これで。

…そして、放課後を向かえた。

「あれ？元樹君はどこだろう？」

あたしは、軽く元樹君を探した。

「浅野！。わりーな、またせちゃった」

「ううん。いこうよ」

「おう」

「なんか、浅野ってすごいよな」

「え？」

「いや、なんか朝学校来るとき、ときどき浅野みかけるんだけどお年寄とかの荷物とか持ってたたり

みんなにあいさつとか」

「ハハハッ。いやいや、なんか困ってる人みると、放っておけないんだよね。お母さんに似たのかも」

正直驚いた。あたしが何気なくやっていることを元樹君はみている

んだもの。

おもわず、わらってしまった。

「そ、そうなんだ」

あれ？なんだろ。元樹君は、焦って顔をそむけた。なんだろう。何か急いでるのかな。

それか、あたしの顔に、なんかついてるとか？鼻毛とか？しかも、顔も赤くなっているような。

「元樹君、顔赤くない？」

「は？あかくねーよ」

「わかった！トマトの食べすぎだ！ハハハッ」

「……………」

あれ？元樹君が赤い顔をしてあたしの顔をみつめている。約3秒間、見つめあった。

「な、なに……………？なにかすいてる？」

「いや、なんでもねーよ」

「そ、そう」

なんか変な感じ。ま、いいや。

∴職員室についた。

『失礼しまーす』

あたしと元樹君は声をあわせた。

「岡本せんせい。」

「おう。きたか、こつちだ」

『はい』

「あのな、2学期のみんなの名簿書いてくれ」

「は、はい」

「んじゃ、がんばれな」

『はい！失礼しました』

おお。元樹君はリードしてくれた。はじめてのことで、ちょっと驚いた。

「あの、なんか元樹君はつか、ありがとね」
「うん、普通だろ、こんくらい」
「あの、あたし名簿書いとくよ、元樹君部活あるでしょ？」
「え？いいよ。一人でムリだろ」
「いいよ。さっきのお礼もしたいし」
「じゃあ、ウォーミングアップしてから、手伝いに来る」
「うん！ありがと」
「じゃあな」
「うん」

あたしは、手を振った。こんなに親しくなれたのは、元樹君だから？でも、元樹君は、他の人とはもっと親しいよね。バカだな。ちよつとだけ、特別とか
思ったりして。あたしってひつかりやすいタイプ？

…そして、教室に入るとだれもいなかった。
外からは部活するみんなの声が聞こえる。楽しそう。

「さてと、相澤さんから……」
あたしは、せっせと地道な作業をしていた。

「はぁー。やっと里香までできたけど、このペースじゃ、おわりそうにないなあ」
一人でつぶやいていた。

「ガラァ……」
教室のドアがあいた。誰だろう？

「坂本君、久しぶり。どうしたの？」

「いや、教室に忘れ物して、廊下歩いてたら、浅野の声が聞こえたから」

「そうなんだ」

「うん。ってか、なに？名簿？一人でやってんの？男子はだれだよ」

「え？元樹君…….だけど」

「ああ、川崎か。なんだよ、こんなの一人でできるわけねーじゃん」

「いや、大丈夫だよ」

「俺、手伝うよ。暇だし」

「あ、ありがとう」

おっと、おくれたけど、坂本 智樹君。坂本君は小学校からの友達で、

あたしの初恋の人でもあった。とてもやさしくて、頭がよく、ひそかにもてている。

本人は自覚がないらしい。クールだけど、頼りになる。やっぱり、いい人。

∴そして、1時間後。

「でつきたー」

「うん。よかつたな」

「うん！本当に助かったよありがとうね」

「いや。じゃあな」

「ガラア…….ドン」

クールだけど、助かったなあ。いい人。

「ガラア！」

「ハアハアハア…….」

「元樹君！」

「ごめん。遅れた。大変だったろ、手伝うよ」

「いや、それがね、坂本君が手伝ってくれたんだ」

「は？今すれちがったやつか」

「あ、そうかも。今いったばっかり。おかげですぐおわっちゃった。ハハッ」

「んだよ…….。あっそ。そんなにうれしかったんだ。じゃ、部活に戻る」

「あ、うん」

「ガラ・・・ドン！」

怒ってる？え？まさかね。うれしかったよ。そりゃ、はやく終わっ
たし。なんだろ？

心臓が痛い。風邪引いてるかも。

はあ、もう。なぜかもやもやする。もうすぐ、学園祭なのに。
これから、波乱の予感がする。

じじく

元樹と智樹（後書き）

こんな恋、してみたくありませんか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2731ba/>

はじめての気持ち

2012年1月6日23時46分発行